

御室焼仁清・色絵変遷に関する研究の再解釈
——尾形深省筆『陶工必用』と、最新の研究成果をたよりに——

宮川 菜々子 (愛知県陶磁美術館)

近世初期、九州における色絵付けのはじまりと時を同じくして、京でも野々村仁清(生没年不詳、以下、仁清)率いる御室窯における色絵付けがはじまる。色絵陶磁は国内において高級品として、主に公武の貴人を中心に受容された。京、御室窯における色絵付けは、狩野派や琳派と言った同時代絵画を取り入れたとされる。このことから、長く陶磁史上および美術史上で重要視されてきたが、その編年研究については課題が残されている。

御室焼の色絵作品中、岡田美術館および藤田美術館蔵の2件の重要文化財(色絵輪宝羯磨文香炉)は、明暦3年(1657)の紀年銘作品であることから基準作となる。両作とも形、色、絵付け方法などにおいて近似性が高く、技術的側面においても同年製作であると言えよう。ただし、御室焼の色絵作品全体を見渡すと目視できる範囲でも緑色の色絵には、ばらつきがある。その色の差は、編年研究を方向付ける手がかりであると考えられてきた。河原正彦(以下、河原)によると、御室焼における色絵は時代が降るにつれて明度が高くなるとされる(1987)。論者は最新の研究成果を用いることで、河原の主張の理解をより深めることができると考える。目視による色の差を分析する方法を、次に記す。

尾形深省(寛文3年-寛保3年[1663-1743]、以下、深省)は、仁清の色絵技術を伝授したとされる。深省筆『陶工必用』には、御室窯で用いられた土と釉薬、および深省が開発した技法について詳細に記されている。仁清から伝授された技法と、深省が研究した技法とを、両者の製作にかかる実作品をひきあいに出しつつ詳細に読み解いてゆく。また、村串・阿部・中井・米井・内田による科学分析を用いた御室焼の色絵付けに関する研究により、国宝(色絵藤花文茶壺)と重要文化財(色絵金銀菱文重茶碗)(ともにMOA美術館蔵)に施された緑色顔料中の含有元素が明らかにされた(2019)。この研究により、『陶工必用』の確かさが科学的にも裏付けられつつあるだろう。

以上の考察をふまえ、緑の色絵が施された御室焼作品の中から年代推定根拠が過去に示された12作品を選び、概括する。次の8作品については、明暦3年頃を境に前後期へと区分できると考える。(色絵波に三日月文茶碗)(東京国立博物館蔵)【前期】、(色絵扇流文茶碗)(湯木美術館蔵)【前期】、(色絵花唐草文鱗形香合)(香雪美術館蔵)【前期】、重要文化財(色絵輪宝羯磨文香炉)【前期】、重要文化財(色絵瓔珞文花生)(仁和寺蔵)【前期】、重要文化財(色絵牡丹図水指)(東京国立博物館蔵)【後期】、国宝(色絵雉子香炉)(石川県立美術館蔵)【後期】。

あくまで一面的な見解には留まるが、河原による御室焼の色絵変遷に関する研究への再解釈として提示し、結びとしたい。